



文字が時にはただならぬ緊迫感を帯び、時には春風のような穏やかさをたたえる。書家田坂州代(芸術卒)の書は変幻自在だ。観賞用の作品のみならず書籍や映画の題字、名刺やあいさつ状まで、あらゆる書を手掛ける。田坂にとって、書とは一期一会の交感により絶えず新たに生み出される表現なのだ。

2012年7月、パリで日本文化をテーマにした博覧会「ジャパンエキスポ」が開催された。4日間で延べ20万人を動員したイベントで、ひととき存在感を放ったのが田坂だった。縦3頁、横2頁の和紙に「祈」と毛筆書きした。東日本震災から一年以上がたち、災いを受け止め前へ進むこととしている母国への思いを表現した。「日本語が読める読めないは関係なく、受け止めてくださった」。揮毫(きごう)を終えた田坂に送られた盛大な拍手と、中には涙ぐむ来場者の姿に、田坂は書が世界に通じることを実感した。

大書に取り組み田坂の姿は、パフォーマンスという言葉では描ききれない。地を踏み締めるような力強い足の運びで長さ1頁はある筆を操る。5、6頁以上のサイズの文字を書く場合、文字の全体像を見ることができないが、田坂の頭の中では筆の運びが明確な像を結んでいる。30代で大病を患い死を覚悟した経験から、常に「最期の書」のつもりで筆を執る。「これが絶筆となっていく

## 「常に最期」と筆を執る

「か」と自問自答しながら作品に命を吹き込んできたと言う田坂は「満ち足りる作品を書き上げられることなんて永遠にないでしょうね」と、自らを諭すように淡々と語る。

### 書でブランド表す

田坂のなりわいを説明するならば「書によるブランディング」とでも言えるだろう。題字のほか、企業や商品のロゴなど書で表せるものなら何でも引き受ける。経営者に書き方を指導することもある。仮に建設業

の経営者ならば「びくともしない安定感」を醸し出すような書を提案するといった具合だ。



東京都立大学教員免許、高等学校国語科免許、高等学校・中学校国語科免許。

小学1年生で始めた書道は、生涯の趣味として続ける気ではなかったが、仕事にするとどう発想はなかった。本学在学中は演劇学科で評論や企画制作、劇作などを学ぶコースを専攻し、歌舞伎・舞踊研究会に所属。優れた舞台と観客とをつなぐマネジメントスタッフになりたいと考えていた。一方、卒業後に東洋大学国文学部に編入し書を学ぶなど、書の研鑽も重ねた。

### 生活の一切を創造に

「24時間を成長に費やしたい」と参加者が集まり、各自が思い思いに歌詞の一節や小説の一部などを書き合いで互いに一番の理解者と認め、田坂が添削する。参加者の1人が「また2度目だが、字形やバランスに劇的な変化を感じている」と田坂を評する。自身の表現に「話す。田坂は書かれた文字が生きてると思えば寸暇を惜しみ、展覧会にももちろん、歌舞伎や邦楽などの舞台にも足を運ぶ。11年には原田が脚本を担当した公演で、物語の主人公が抱えるそれぞれの地獄をテーマにした作品に「六の宮」役で出演。味を抱くものに目を輝かせて向き合いう難しい役を演じ切った。「書家と

転機は00年。「インプットするばかりでなく、今後の勉強のためにも一度アウトプットの作業もしておきたい」と、自ら企画した初の個展を東京・銀座鳩居堂で開催。すると、

直筆の案内状を目にしたデザイナーとして揮毫するだけでなく、登場人物として筆を運んでほしいという難題に真正面から取り組んでくれた。これを作品を良くするために書家の立場から意見をくれるなど、そのチャレンジャーが来るようになった。今では「田坂が題字を書いた芝居は当たる」とけられた」と原田は振り返る。10年6月から毎月1回、東京都中野区のカフェでペン字のワークショップを開いている。20代から50代の参加者が集まり、各自が思い思いに

鈴木 智紘